The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞六車由実『驚きの介護民俗学』／同『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』
Author(s)	飯守, 桂一
Citation	日本学報. 2017, 36, p. 105-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【書　評】

六車由実『驚きの介護民俗学』／同『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』

飯守　桂一

1．両書の紹介

ここで取り上げるのは，六車由実『驚きの介護民俗学』（医学書院，2012年，以下①）・同『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』（新潮社，2015年，以下②）の2冊である。

この両書は，民俗学の研究者であり介護職員でもある著者が，日々の介護の現場で出会う利用者たちとの関わりやそのエピソードを「介護民俗学」の視点から記した話題の書である。「介護民俗学」とは，かつて民俗学者として大学で教鞭をとっていた著者が，介護現場の仕事のなかでの驚きと発見を手がかりに，民俗学の可能性を込めて掲げた名称である。著者は『驚きの介護民俗学』の「はじめに」で次のように述べている。

> 「介護民俗学」などという分野があったわけではないし，ましてやそんな言葉だってなかった。私自身の反省でもあるが，民俗学にとって，介護の現場は関心の外だったのである。けれど実際に現場に入ってみると，先ほど述べたように介護現場は民俗学にとってとても魅力的な場所だし，また，民俗学でこれまで蓄積されてきた知識や技術が介護現場に役立つ可能性もあるのではないか，と私には思えた。そこで，「介護現場は民俗学にとってどのような意味をもつのか？」，そして「民俗学は介護の現場で何ができるのか？」という二つの方向性から問題提起をしてみようと思い，あえて「介護民俗学」を掲げてみたのである（①5-6頁）。

これまで民俗学では，高齢者施設がフィールドワークの対象として認識されることはほとんどなかったといえる。著者がいうように，老人ホームの一般的なイメージは身体能力も記憶力も衰えた人びとの集まる場であり，したがって民俗学者にとっては老人ホームの利用者が聞き書きの対象者になりうるなどとは思いもよらなかったのである。かつて民俗

学者の宮本常一は日本列島をくまなく歩き，著書『忘れられた日本人』（未来社，1960年）のなかで辺境の地に生きる人びとの暮らしに目を向けた。そして本書で著者は，同じように介護現場で出会う老人たちを民俗学の舞台に浮かび上がらせたといえる。老人ホームに集まった「社会から見捨てられた」人びとは，著者のいう「忘れられた日本人」であった（①38-39頁）。高齢者施設の介護現場は，まさに「民俗学の宝庫」（同前）であり，多様な人生を歩んできた人びとの集う場なのである。

そしてこの民俗学的なアプローチにより介護現場への関わりを試みようとする「介護民俗学」は，利用者と介護者との関係も変容させていく。本書では，民俗学の手法である聞き書きによって見出されたさまざまな利用者たちのエピソードや，日々の介護現場での関わりについて，著者の民俗学研究者と介護者という2つの視点から語られている。以下，まずは両書の構成を紹介しておく。

『驚きの介護民俗学』は，著者が介護現場であるデイサービスと特別養護老人ホームに勤務しながら，１年３ヶ月にわたる15回の連載として雑誌およびウェブマガジンに発表したものがもととなっている。連載された雑誌は，『看護学雑誌』（74巻3～12号，医学書院，2010年3～12月），およびウェブマガジン『かんかん！』（「看護師のためのwebマガジンby医学書院」，2010～11年）である。

本書の「はじめに」では，老人ホームのエピソードとともに「介護民俗学」とは何かについて述べられ，第1章「老人ホームは民俗学の宝庫」では，聞き書きによるさまざまな利用者のエピソードが著者の「驚き」とともに記されている。第2章「カラダの記憶」では，介護現場で行われるレクリエーションや利用者への見守り，日常的な介助の場面を通じて発見される利用者たちの身体記憶について述べられる。それはまさに「利用者の行動から見える生活史」（①60頁）であるいえる。第3章「民俗学が認知症と出会う」では，「介護民俗学」が重度の認知症の人びとに何ができるのか，という問いのうえで利用者と関わり，これらのエピソードを交えて「聞き書き」の有効性について考察が試みられる。

第4章「語りの森へ」では，民俗学と共通性を持つと考えられていた回想法への批判的考察に基づき，著者の模索する「介護民俗学」と回想法の違いについて述べられる。両者の違いとして重要なキーワードとなるのが利用者との関わりの中で生まれる「驚き」であり，そしてもう一つは利用者と介護者との関係のあり方である。「介護民俗学」を特徴づける聞き書きは，利用者と介護者という固定された関係を逆転させる可能性を持ち，また聞き書きを形にした『思い出の記』はターミナルケアとしての意味も持つと指摘する。

終章「「驚けない」現実と「驚き続ける」ことの意味」では，著者が介護現場での仕事に追われて「驚けない」状況に陥り，過酷な介護現場の実態が明らかにされる。「おわりに」では，上野千鶴子『ケアの社会学：当事者主権の福祉社会へ』（太田出版，2011年）のケ

アを相互行為とみなす考えについて触れ，民俗学的アプローチもまた介護現場における相互行為によって成立する一方，介護現場に内包される暴力性から免れることはできないと指摘する。また介護保険法による「介護予防」を「介護準備」として捉える視点や，民俗学を学んだ学生たちを含むさまざまな分野の人びとがもっと自由に施設へ出入りできる環境づくりが提起されている。

以上，2012年に出版された『驚きの介護民俗学』は，静岡県東部地区の特別養護老人ホームとデイサービスで過ごすさまざまな利用者たちとの関わりのなかで書き上げられたものである。著者はこれら大規模施設で一介護職員として三年半勤務したのち，縁あって静岡県沼津市にある小規模デイサービス「すまいるほーむ」の管理者兼生活相談員として働くことになる。

次に紹介する『介護民俗学へようこそ！「すまいるほーむ」の物語』は，新たな介護現場である「すまいるほーむ」のエピソードを中心に，『Web Foresight（ウェブ・フォーサイト）』（2014年1月～2015年1月）に連載されたものがもとになっている。

第1章「聞き書きの沃野へ」，第2章「死を想う」は，「すまいるほーむ」の日常風景とともに，前著と同様「介護民俗学」という方法を拠り所に利用者たちのエピソードが語られる。第3章「すまいるほーむができるまで」では，設立者である村松誠氏への聞き書きにより，日本の高齢者福祉施策の不備のなかでいかにして「すまいるほーむ」が誕生したかその経緯が語られる。第4章「認知症の人と共に」では，聞き書きによって認知症の利用者が体調不良に陥った「聞き書きクライシス」のエピソードや，食事介助の魅力，認知症の人の妄想や幻覚による物語的な世界への共有のあり方について述べられている。

終章「聞き書きで介護の世界が変わっていく」では，「すまいるほーむ」の利用者とスタッフとの座談会の様子とともに，「共に生きる」社会のあり様について著者の見解が述べられる。そして最終節では，「表現としての聞き書き」（②283頁）という視点から，介護現場のスタッフたちが表現者になるべきだと主張する。表現者になるとは「表現することを通じて，そこに表現の対象者に真摯に向き合い，対話を続けること」（②302頁）であり，そうした表現者としてのあり方は，介護の現場で「人と人として向き合い，共に生きようとする介護の在り方と決して矛盾するものではな」い（同前）と結んでいる。

2．介護現場での聞き書きによる関わり

そもそも著者はなぜ介護現場で職員として聞き書きを行うにいたったのか。さきにも述べたが，大学で民俗学を教えていた著者は，民俗学の新たなフィールドを求めて介護現場に足を踏み入れたわけではない。詳しく述べられてはいないが，たまたま縁あって老人ホー

ムで働き始めた著者は，そこで高齢者ケアの方法の一つである回想法を知ることになった。そしてこの回想法と聞き書きには多くの共通点があることから，これまで民俗学者として得た知識や経験が介護現場で活かすことができるとの考えにより実践に至ったといえる。

両書はタイトルに民俗学を掲げているが，著者と同様に福祉の現場で働く評者の立場からいえば，両書は介護に携わる人びとにとって必読の書である。評者は民俗学者ではないため，両書に収められた聞き書きの内容について論じることは控えたい。また著者と同じ福祉職といっても，評者の場合，障害者福祉をこれまでフィールドとしてきたので，高齢者介護の現場について決して詳しいわけではない。しかし分野は異なるものの両者の現場に共通していることがある。それは，「介護現場」には「対象に深い関心を抱き，相手との関係に巻きこまれていくという」「姿勢」が「なくてはならない」，「なぜなら介護とはまず何よりもコミュニケーションだからである」という，上野千鶴子が指摘している点である（上野千鶴子「回想法でも傾聴でもなく，そして民俗学でもなく：ちづこのブログNo.23」，https://wan.or.jp/article/show/4418。共同通信を通じて配信され2012年4月1日付『北日本新聞』等に掲載された上野による『驚きの介護民俗学』の書評を再録したブログ記事）。この上野の論点は，本書で描かれる著者の姿勢とも重なり合っている。そして本書で著者は，一貫して介護する側とされる側との「非対称な関係」を問題視し，「現場における介護の在り様を変えていく必要」（②11頁）を訴えている。以下では，これらの問題提起を踏まえ，ケア・ワークの現場からの視点により書評を展開したい。

まず本書の中で取り上げられている聞き書きと回想法の目的の違いについて著者の解説を引用する。民俗学における「聞き書き」は，「対話のなかから調査対象者の言葉を聞き，書きとめることで民俗事象をとらえ」ることを目的とする（①95頁）。つまり聞き書きでは，「語られた言葉をいかに正確に記述し，そして文脈に沿って解釈するか，ということが最も重要となる」（①96頁）。一方，これまで高齢者ケアの方法として用いられてきた回想法では，語られた言葉よりも利用者の非言語的表現や気持ちの動き，メンバー間のコミュニケーションといったことが関心の中心となる。なぜなら「回想法とは，高齢者の過去の人生の歴史に焦点をあて，過去，現在，未来へと連なるライフヒストリーを傾聴することを通じ，その心を支えることを目的とする技法」（①149頁。ただし黒川由紀子『認知症と回想法』金剛出版，2008年に基づく叙述）だからである。以上のように，聞き書きでは語られた言葉を正確に記述し，解釈することを重視するが，回想法では語られた内容よりも語り手の心を支えることを目的とする点に違いがある。

この回想法の目的にも見られるように，介護や福祉の世界では言語的コミュニケーションよりも非言語的コミュニケーションが過剰に重視されがちであると著者は指摘する。介護の現場において，利用者の言葉に耳を傾けるという行為は「傾聴」と呼ばれ，基本的

なコミュニケーションの方法の一つとされている。しかし「傾聴」は利用者の話す内容よりも聴く側の態度の方が重視されている。これは裏返せば利用者の言葉の軽視とも捉えられる。このようなコミュニケーションのあり方を疑問視する著者は，聞き書きという新たなコミュニケーションのあり方を本書で提起したといえる。

コミュニケーションとしての聞き書きとはどういうことなのか。回想法や傾聴と違って，民俗学的アプローチである聞き書きでは，利用者の言葉に価値が見出される。それは著者のいう，利用者への聞き書きに「驚き」を感じることである。利用者の語りに驚きを持って耳を傾け，利用者に対して深い関心を持つこと，そこにはケアを目的とする関係を超えたコミュニケーションが生み出される。そこには，利用者を介護の対象としてのみ認識するのではない，ケアの領域には収まらない,「相手との関係に巻きこまれていく」「姿勢」(前引の上野の言葉) がある。

しかし，介護の現場では，誰もが利用者の語りに驚きと関心を持って聞き入ることができるわけではない。上野が指摘するように，著者には語りに驚くだけの民俗学者として培われてきた「コード (解読装置) とセンス (感受性)」(上野前掲ブログ記事) が備わっている。したがって，このようなコードとセンスを備えていない介護者にとっては，著者のような民俗学的アプローチから利用者とコミュニケーションをとることは容易でないといえる。ケア・ワークの現場では，コミュニケーションはケアの基本であると同時に最も難しい問題でもある。次の章では，介護現場におけるコミュニケーションの困難さについて考えてみたい。

3．介護現場における非対称な関係

介護現場で利用者と「コミュニケーションをとる」とはどういうことなのだろうか。評者の経験を述べると，介護実習やボランティアとして高齢者施設へ訪れたとき，最初に職員からよく言われたのが,「利用者さんとコミュニケーションをとって」である。当時この言葉を聞くたびに違和感を覚えた記憶がある。いきなり漠然と「コミュニケーションをとって」と指示されても，慣れない介護現場のなかで自分がどのような立場から利用者と関わればよいのかその状況をすぐには受け入れられなかった。介護の現場とは利用者への支援を目的とする場であり，そこには常に介護する側とされる側という関係性が存在する。そして介護とは，一般的には「弱者」を「助ける」「保護する」「世話する」行為であるとされる (①219頁)。よって介護される側は常に劣位な状況に置かれ，介護者との非対称な関係の中でコミュニケーションがとられることになる。このような関係性に違和感を覚えてしまうとお互いに「コミュニケーションをとる」ことが困難になってしまうのである。

確かに介護現場が利用者への支援を目的とする以上，介護者はこのような関係性をある

程度引き受けて割り切らないと現場が成り立たないのも事実である。しかし，介護者がこのような関係性に全く疑問を感じることなく日々の介護に従事すれば，利用者を介護の対象としてのみ認識し，利用者への関心も持てなくなってしまうのではないだろうか。こうなれば，介護現場の仕事のなかで，介護する側は，利用者とのコミュニケーションよりも，食事介助や身体介護の場面で必要とされる介護者自身の介護技術へと関心を向けていく。食事介助や身体介護も，「ケアする者とケアされる者とのあいだの「相互行為interaction」」（上野前掲書，39頁）として成り立つ以上，そこにはコミュニケーションが存在する。しかし介護する側の関心が自身の介護技術にのみ向かい，また利用者を介護の対象としてしか見られない場合，それは利用者不在の介護であり，そこにコミュニケーションは存在しないといえる。

そしてこのような状況に陥らないためにも，ケアする者とケアされる者という関係を超えたコミュニケーションが求められるのではないか。その意味でも民俗学における聞き書きというアプローチは非常に示唆的である。著者は，「介護民俗学」のアプローチによりもたらされる驚きについて，「驚きは利用者と対等に向き合うための始まりだ」と題する節（①203-218頁）を設けて説明しているが，このように利用者と対等な関係を築くために模索することが，「相手との関係に巻きこまれていく」ことなのではないだろうか。聞き書きの場では一時的にではあるが，介護する側とされる側という関係性を超え，利用者の語りによって介護者との関係が「教える側」と「教えを受ける側」とに変化する。つまり，介護者が利用者と対等に向き合うことを求めるのであれば，介護現場でのさまざまな場面のなかで，両者の関係を常に変容させていくことが必要なのではないだろうか。そして本書の聞き書きのエピソードのなかで見られるように，介護の現場が「驚き」と関心に満ちた場となるよう，利用者を含む介護に関わる全ての人びとの多様なセンスを活かせるような場づくりが必要であるといえるだろう。

4．福祉施設で表現するということ

福祉の現場は，さまざまな経歴の持ち主が集まっている場である。そしてそこには，人びとによるさまざまな表現のあり方が存在する。福祉の現場は利用者や介護者も含む誰もが表現者となる可能性を秘めている。そして，その場に集まる人びとが，それぞれの表現を感じ取ることで，介護という関係を超えた関わりのなかに「驚き」や関心を見出すことが可能となる。

今回取り上げた著書で，著者は，「介護現場のスタッフたちがみな聞き書きの表現者になればいい」（②295頁）と述べている。介護者が聞き書きの表現者として利用者と関わる

とき，そこには支援を目的としない関わりが生み出される。回想法や傾聴とは異なり，「支援を目的としない聞き書き」（②174頁）は，「聞き手と語り手とが対等な人間同士として向き合い，関係性の中で進められていくもの」（②176頁）である。そして聞き手が「驚き」とともに魅了させられる利用者の語りもまた介護現場で生じる表現の一つである。この利用者の語りという表現が，「支援を目的としない」関わりのなかで生まれている点に着目する必要があるのではないか。このことを踏まえ，最後に評者が関わっている福祉現場の事例を少し紹介したい。

評者が支援員として関わる福祉施設では，そこに通う知的障害のある人びとが，日々の活動として絵画制作などの創作活動に取り組んでいる。これらの活動を通じて評者が感じることは，そこでの利用者とスタッフとの間には支援を目的としないさまざまな関係が存在していることである。たとえば，スタッフは利用者との日々の関わりのなかで，彼らの独創的とも呼べる表現に驚かされ，魅了される場面が多々ある。とくに利用者の表現や作品に関心を持つ芸大出身のスタッフらは，このような彼らの表現に対して驚くだけのセンス（感受性）が備わっているように思う。そしてこのような利用者とスタッフとの関わりは，ケアする側とされる側という支援を目的とした相互行為に収まることのない，これらの関係を「一時的に非対称性から解放し逆転させるダイナミズムとしてとらえることができる」（①222頁）。しかし，「介護民俗学」によるアプローチとは異なり，創作活動に取り組む福祉施設の現場では，利用者の表現に「驚く」センスはあっても，それらの表現に対するコード（解読装置）を備えていないことが課題でもある。

一方，「介護民俗学」に対しても，期待を込めて最後に課題を一つ提起したい。それは言葉でコミュニケーションをとることが困難な利用者に対してどのように民俗学的アプローチを試みるかということである。回想法や傾聴が非言語的コミュニケーションを重視するのも，ひとつにはこのような理由があるからでもある。だがここで，ケアする者が，言葉に限定されない利用者のさまざまな表現を「驚き」を持って感受し，そしてこのような利用者の表現をケアする者が書き記して表現することができるならば，「介護民俗学」の可能性はさらに広がるのではないだろうか。そして，「介護民俗学」に限らず，ケアに携わる人びとが，この書き記すという行為をただ記録する行為に終わらせることなく，それぞれの視点を持ち表現者としての意識を持って利用者と向き合い，対話し続けることが必要なのではないか。そのためには，介護現場で生じる利用者の語りやさまざまな行為，そしてそれらの行為がもたらされる背景について，想像力を持って捉えることが大切なのではないだろうか。

以上，本稿では，ケア・ワークの現場の視点から書評を展開してきた。評者の力不足により，本書に収められた利用者たちへの大変興味深い聞き書きについて具体的には触れることができなかった。ここであらためてお詫びしておきたい。